様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２６ 日現在

機関番号：３２６８８
研究種目：若手研究
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ１３０５３

研究課題名（和文）後置現象からみた会話の動的展開の記述的研究

研究課題名（英文）A Study of the Dynamic Progression in Conversation: The Case of Postposing Phenomena

研究代表者
苅宿　紀子（KARIYADO, Noriko）

和光大学・表現学部・准教授

研究者番号：８０６０８８２８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　900,000円

研究成果の概要（和文）：　主な成果は二つある。一つ目は、述部が先行発話に影響を受けて前置する場合があることを明らかにしたことである。述部が先行発話の言い換えや繰り返しになっている例である。二つ目は副詞を例として、後置の用法を明らかにしたことである。〈本当に〉は話題の終盤の発話で述部に後置し、話者の心的態度を示す用法がある。〈たぶん〉や〈絶対〉などは、発話態度の変更や、発話態度を示す表現の追加のために後置になる場合がある。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　くだけた雑談における発話では、書きことばのような順番どおりに語が並ぶわけではない。書きことばを基準にして考えれば整っていない「破格」であるようにみえる発話であっても、話しことばにおいては不自然に感じられないことが多い。後置現象の分析によって「文」としては破格でも、「発話」として成り立っているのはどのような発話なのか、また、そのような「発話」がどのように機能しているのかを明らかにすることができた。今後の話しことばの研究にもつながるもので、本研究には意義があると考えられる。

研究成果の概要（英文）：There are two main results. The first is to elucidate the cases in which the predicate can be preposed influenced by the preceding utterance. This is an example where the predicate is a paraphrase or repetition of the preceding utterance. The second is to clarify the usage of postposition using adverbs as examples. In the final part of a topic, the word “hontoni” is postposed to the predicate to show the speaker's mental attitude. The words “tabun” and “zettai” are sometimes postposed to change the attitude of speech or to add an expression indicating the attitude of speech.

研究分野：現代日本語の話しことば

キーワード：談話　後置　話しことば　副詞　繰り返し　言い換え

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

これまでの話し言葉の文法研究では書き起こし資料のみで分析されているものが多く、言い終わった完結した発話をあとから「静的」にみて考察することが多かった。発話途中の話し手の意識の変化も含めた会話の「動的」な展開の様子を記述する研究はほとんどない。話し言葉でのコミュニケーションを明らかにするためには、会話の動的な展開の様子について考察する必要がある。本研究の学術的な問いは、「話し手の意識」という観点から捉えると、会話はどのように動いて展開していくのかということである。

２．研究の目的

本研究では会話の動的な展開の様子を明らかにするために、話し言葉における「後置」現象に注目する。日本語は SOV 言語であり、文末に述語を置くのが標準であるが、話し言葉においては「楽しかったけどね俺は」「それ思うほんとに」のように述語よりも後に文の要素を置く現象がみられる。話し言葉の特徴の一つとして、規範的ではない形の発話がしばしば出現するということがあり、後置現象も発話計画の失敗により出現した単なる乱れた形の発話であると捉えることもできる。

しかし、後置現象は話し手が話しながら即時的に言い添えたり付け足したりした結果であると捉えることもできるだろう。標準の構文から外れて述語の後に文の要素が付加される「後置」現象を見ることにより、発話の最中にも刻々と変化するコミュニケーションの動的な様子を記述し、「話し手が何をしようとしているのか」という視点から、後置現象の形態的特徴と機能を明らかにする。

３．研究の方法

話し言葉でよく使われる語や用法が出現しやすい「くだけた雑談」を資料とするために、大学生三者間の自由会話を収録した。次に示すような三者である。〔１〕三者とも親しい友人同士、〔２〕三者ともが先輩後輩関係ではない、〔３〕三者のこれまでの主な居住地が東京・神奈川・千葉・埼玉のいずれか、〔４〕三者ともが日本語母語話者、〔５〕三者ともが東京都多摩地域にある大学の大学生。

言語研究のための録音録画調査であることを伝えたうえで、50 分を目安に特に話題を設けず自由に話してもらった。収録時期は 2016 年 12 月から 2017 年 1 月である。その録音・録画データを書き起こして資料として用いた。

本調査では談話において述語よりも後に文の要素が置かれる現象は、書き言葉における修辞法としての「倒置」とは異なるものと捉える。したがって「後置」という用語を用いることとする。次の条件にあてはまるものを調査対象とした。

・述語より後ろに置かれた文の要素。
・述部も後置要素も同一話者が発話したもの。
・述部と後置要素の間にポーズがあるものも対象とするが、ポーズがある場合もイントネーションから「述部と後置要素」で一発話と判断できるもの。

４．研究成果

（１）雑談の後置現象からみた会話の展開

「先行発話の形式との関連」という観点で後置現象を分析した。後置要素がなければ命題内容が聞き手に通じないタイプの後置発話を取り上げ、次のように分類した。まず、述部が他者の先行発話の形式に影響を受ける場合と受けない場合とに分けた。前者は「述部が他者の発話の繰り返し／言い換えである場合」「述部に他者の発話に対する答え／評価がある場合」に分類した。後者は「述部と後置要素を一続きで発話する場合」と「後置要素の前に間がある場合」とに分類した。前者の「述部が他者の発話の繰り返しである場合」の例としては以下のような例がある。

【例１】１:10fb 行かない
２:10fa 行か★ないよねー そんなこの年になって
３:10fb →行かないよねもう←

話者 a は話者 b の「行かない」を繰り返している。述部が前の発話とつながっており、あとで行かない理由を付け足している。後置要素のほうが新出情報ではあるが、この会話では動物園に

「行かない」ということを話しており述部が前に置かれている。
「述部に他者の発話に対する答えがある場合」の例としては以下のような例がある。

【例２】１：1fa え、じゃおたくになる前の記憶もいらない記憶だったのかな
２：1fb じゃない、忘れてるから

「じゃない」は質問に対する回答であり前の発話の流れを受けて「じゃない」が先に来ている。
「後置要素の前に間がある場合の例」として以下のような例がある。

【例３】1 :10fa なんかでもタバコの吸い方はね、レクチャーしてくれたよ＜少し間＞{10mc ああ} 同期の人が
2 :10fb ああああああ

話者ｃ「ああ」はよく理解したという意味での「ああ」ではない。1 ラインの「してくれたよ」というところで文末の表現が出てきたので何となく相づちを打ったような反応である。本体のあと、少し間があり、話者 c の反応があってから後置要素が発話されている。聞き手は反応しているが情報が足りないと話し手が判断して情報を補足している。
後置発話生成の要因として二つの要因を確認した。一つの要因としては他者の先行発話の形式に後置発話の述部が影響を受けたということがある。もう一つの要因は計画の失敗で必要な情報を言い忘れたために補足として後置要素が付加されたということである。しかし、その場合も話者にとっては述部のほうに注目があって述部が前に置かれたと考えられる例であった。
親しい三者間の会話では三者の発話が入り組んでお互いが情報を補いながら会話が進んでいくことが多い。その中で前の発話で注目されている要素に話者の意識があって、後置発話が生成されると考えられる。文法的には後置要素が前にあっても後ろにあってもよい例もあるが、会話の流れから考えると、後置されていることが自然であるという例もみられる。

（２）発話における〈本当に〉の出現位置と用法

言語形式を〈本当に〉に絞り、述語に前置する例も含めて分析を行った。「ほんと」「ほんとー」「ほんとに」「ほんとーに」を対象として用例を採集したが、上昇イントネーションの例は対象外としている。相づち・応答 17 例、述語前置 42 例、述語後置 19 例の計 78 例の用例がみられた。述語前置のうち６例は述語が無い例である。この６例は発話内の位置としては述語の前に当たる部分に〈本当に〉が出現しているが、他の話者の発話が始まって述部が発せられなかったり、述部を言い淀んだりしている例である。
述語が有る例で考えると述語前置が 36 例、述語後置が 19 例であり、34.5%が述語後置の用例であった。今回の調査は話者数が少なく個人の話し方の癖が結果に反映された可能性もあるため一般化することは難しいものの、述語が有る例では３分の１程度の用例が後置の用例であり、本調査においては珍しい例ではないといえる。
述語の前に置かれる〈本当に〉には次のような例がある。

【例４】 1 :1fc や、二十歳から二十五までまだいいんだよ。
2 :1fa え、でも、だって…//。
3 :1fc［会社名］のＣＭ<笑い[複]>。
4 :1fa いや、ほんと二十五まではまだー、若いって思ってられるかもしれないけど、二十五超えた瞬間よ、もー、もーあーって、で、いっつもその話になるときにさ、結婚まであともう五、六年しかないんだって話なんだけど。
5 :1fc はーーー。【高い声で】

「ほんと＋下線部」で１ラインの内容を認めつつ、波線部に示される「二十五」才以降はもう時間がないという主張を展開している。〈本当に〉で先行発話を受け止めて先行発話の内容を言い換えている。先行発話の内容を受けて使われ述語に前置している。

【例５】１：11mc <少し間>タクシードライバーはほんとにやりたかったのかね？↑ {11ma うん}。

文の要素の後に置かれた〈本当に〉の例で、述部の近くに前置し、自己の発話の述部を修飾するために使われているものもある。述語に前置する〈本当に〉には先行発話を受けるものと自

己の発話内部で働くものがある。
　述語の後に置かれる〈本当に〉としては次のような例がある。まず、焦点を含む述部の後の〈本当に〉の例である。

【例６】１:5ma まーてかまやっぱ先生は、本読むよねー、てかだからもうほんとすごい。
２:5mc ちゃ、辞書が多いの、、【「辞書が」を強く発音】
３:5ma やでも、★やでも絶対読んでる★と思うよ、全部読んでると思うよ、たぶん。
４:5mc→ほんとに←。
５:5mb→めっちゃ読んでる←。

【例６】の「ちゃ」は「ちがう」ということであり、２ラインの下線部は焦点だと考えられる。【例６】は重要な要素を先に出し、その内容全体を話者が「真」であると評価・判断していることを示すために〈本当に〉が用いられている。この〈本当に〉は先行発話との関連で述語が前に置かれ〈本当に〉が述語の後に置かれたものである。
　次に話題終盤の発話の述部の後の〈本当に〉である。

【例７】１：10mc まあでもねーがんばってください★ほんとに
２：10fa→がんばり←ます

　例の前に今後の予定に関するやりとりがあり、話題の終盤で話者ｃは「がんばってください」という励ましでまとめ、「ほんとに」を後置している。【例８】は主に話者ａと話者ｂが話していたことに対して話者ｃがまとめており、〈本当に〉は先行発話を含めた話題全体に対する話者の態度を示している。
　焦点をふくむ述部の後の〈本当に〉と、話題終盤の発話の述部の後の〈本当に〉の例には〈本当に〉を前置すると、後置の場合と発話全体の意味が異なるものも見られた。談話レベルで考えた場合に、理由があって〈本当に〉を後置しているのであり、言い忘れたものを後で追加しているわけではないと考えられる。文レベルでの機能のみだけでなく、談話レベルの機能も持つために、〈本当に〉は後置の用例が多くなっていると考えられる。

（３）発話における副詞の出現位置と用法

　〈ちょっと〉〈たしか〉〈たぶん〉〈やっぱり〉〈絶対〉を調査対象とし、前置の例も含めて用例を採集した。「ちょっと」は後置の例が少なく出現実態は他の４語とは異なる。「ちょっと」を除くと、前置が 157 例、後置が 32 例となり、後置の割合は約 17%である。調査対象が限られているため、副詞全体としての一般化はできないが、少なくとも「たしか」「たぶん」「やっぱり」「絶対」の４語は平均して６回に１回程度は後置となっている。
　次の例は「発話態度の変更」のために副詞を後置する例である。

【例８】１：10mc うん、ま、でもやっぱ便利だよ、車あるとたぶん。
【例９】１：11ma やっぱりあそこの学校がおかしいんだよ、たぶん。

　両者とも〈たぶん〉の前に「やっぱ（り）」があり、当然そうだと思うことを伝えたものの、それが言い切れないと思いなおした話者が〈たぶん〉を使って発話内容に対する態度を弱めていると考えられる。発話態度を「強」から「弱」へ変更している。
　次の例は「発話態度を示す表現の追加」するために副詞を後置する例である。

【例 10】１：11ma＜沈黙＞まああれ好きじゃなきゃ続かない、あの仕事絶対。

【例 10】は〈絶対〉の後置の例で、発話全体に対する話者の発話態度を示していると考えられる。述部でも「続かない」と言い切っており、述部と同じような態度を示していると考え「追加」に分類した。
　先行研究でも副詞の語順について考察されてきたが、くだけた雑談における発話では、書きことばのような順番どおりに副詞が出現するわけではなない。同じ副詞が繰り返されたり、発話の終わりで話者の発話態度を調整するために用いられたりすることもある。発話態度の調整についても、発話の途中で示されていた発話態度を変更する場合と、同じような意味の繰り返しをして話者の発話態度を明確にする場合とがある。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 苅宿紀子	４．巻 200
２．論文標題 発話における〈本当に〉の出現位置と用法	５．発行年 2024年
３．雑誌名 国文学研究	６．最初と最後の頁 〔162〕-〔148〕
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 苅宿紀子
２．発表標題 雑談の後置現象からみた会話の展開
３．学会等名 表現学会東京例会
４．発表年 2021年

１．発表者名 苅宿紀子
２．発表標題 発話における副詞の出現位置と用法
３．学会等名 表現学会全国大会
４．発表年 2024年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関